

第 50 号 特別記念号

稲山会通信

No 50

発行人:村田宣男 編集人:行方正幸 TEL: 043-486-0239 Mail: yukuemnamekata@gmail.com

巻頭言:稲山会通信第 50 号の発行に寄せて

村田 宣男 (S53 年卒)

代表に就任してから間もなく 1 年になります。会員の皆様のお力添えでこの間大きな問題もなく務めを果たすことができました、厚く御礼申し上げます。

「山の会」は、近々創立 70 周年を迎えますが、古くから受け継がれた良さを伝承しつつ新しい良さも取り入れ、更なる会の発展を目指したいと思っております。そのためには、現役の活動活性化と若手会員の増加が不可欠です。幸い、昨年当会の支援で購入したテントとマットが早速夏合宿で使用され、南北アルプス他多数の登山も行われて現役諸君の活動も活性化してきました。また、役員各位の精力的な活動で会報や連絡網の電子化、web ページの更新復活に加え SNS の活用等も進んでいます。若手会員の積極的参加、世代を超えた交流も実現しつつあります。

私もそうでしたがしばらく山登りを離れ、稲門山の会とも疎遠になっている方も多いと思います。従来紙の会報に加え、会の活動に接する窓口を広げることで、青春時代を山で過ごした仲間がいつでも戻れる心の故郷を目指しますので宜しくお願いします。

—Contents—

巻頭言:村田宣男

特集Ⅰ:山の備忘録

上田訓央

宮野準治

斉藤雄二

西山一夫

小竹正雄

行方正幸

倉本 弘

柴原 至

本田伸樹

井上隆則

特集Ⅱ:2024 年山の記録

岳人列伝

お知らせ

編集後記

【特集Ⅰ：山の備忘録】



(1) 上田訓央 (S33 年卒) 不帰岳Ⅱ峰センターリッジ積雪期初登攀



(不帰岳)

数多い山行の中でどの山行も思い出せないものはない。中でもこの山行は特に鮮明なものとして記憶されている。後立山連峰にある不帰岳はⅠ峰、Ⅱ峰、Ⅲ峰とあるが、1960年3月12日～14日に登った不帰岳Ⅱ峰のセンターリッジ・正面壁の積雪期登攀である。

唐松沢から縦走路まで真っすぐに登るだけだ。唐松沢でザイルを出し、リッジの末端に取りつく。

(きのこ雪)

岩だらけなら問題はないが凹凸があるリッジ雪が着くとどうなるのか、想像もつかなかったが、なんときのこ雪になるのだ。この処理が大変。

左右は深いルンゼで回り込むことができない。

センターリッジの中程で巨大なきのこ雪に阻まれた。二階建ての家がそっくりきのこになって乗っているのだ。登るのには何とか登れるのだが下りるのが大変で支点がないのだ。アイスハーケンを出して雪に差ししてみる。

たたいて入れる程雪は固くない。ズブズブと差し込める程度、これではなんも心許ない。なんとか効かせたいとの思いで差し込んだ2本のアイスハーケンに小便をかけて、少しでも雪が締まってくれ、少しでも効いてくれと、祈るような想いで煙草に火をつけて待つことにした。



不帰岳Ⅱ峰センターリッジの全容

下から「大丈夫かぁ」と声がかかった。

ハーケンにカラビナをかけて、ザイルを通して下降に入る。文字通りジワリ、ジワリと支点到に負荷をかけないようにきのこ雪の下に降り立つことができた。下で私を確保していた仲間以後で聞いたことだが、あそこで私が落ちたら反対側に飛び込むつもりであったと、話をしていたそうだ。緊張した場であった。

リッジの途中でビバーク。さすがに明け方は寒くて眠れなかった。いくつかのきのこ雪を上り下りしてセンターリッジがなくなるところがX状ルンゼの交点で、この先は正面壁になる。

これからは雪崩が心配である。出来るだけ早く通過したい。体力勝負である。

稜線からの下りはⅡ・Ⅲ峰間ルンゼを通過して唐松沢に入る。雪崩の心配から気温の下がる迄時間を過ごし、夜になりルンゼには入ると腰までの深い雪。通夜の行列のような静かな下降であった。

唐松沢に入っても油断は出来なかった。昼間に雪崩れたデブリの上にうっすらと雪が被っているのだ。落とし穴の上を歩いているようだ。デブリに足をとられ、何度転んだことか。アイゼンと輪カンの両方を付けての行動だったが、テント場に着くまで片方の輪カンを落としたことにも気がつかなかったのだ。何とか降りてこれた。長い3日間だったが中身の濃いものであった。



センターリッジの取付き 確保者上田 OB

(回収されたアイスハーケン)

記録整理のために半年後の夏に同じルートをトレースした。岩のセンターリッジは快適で、気持ちよく登れた。中程を過ぎ大き目の突起を登りきったところで目にしたのが何とカラビナの付いた2本のアイスハーケンであった。

リッジの上にちょこんと。

私は思わず叫んだ。「あっ！ 俺のだ！」

あの時に雪に差し込んだハーケンが、雪の無くなった狭いリッジの上に乗っていた。嘘のような本当の話である。現実にてあって、驚きと喜びと複雑な感覚であった。思わぬ収穫に充実した山行であった。

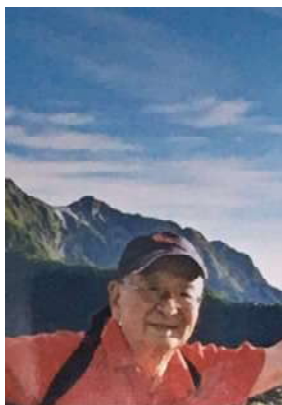
(積雪期初登攀)

後で知ったことだが、この山行が重箱の隅をつついたような記録だが、国内の初登攀になった。60年以上も前の話である。



小さなきのこ雪

(2) 宮野準治 (S35 年卒) 劔岳の思い出



鹿島槍ヶ岳と宮野 OB



劔岳の三ノ窓の岩場



チンネ（凄い！）

【チンネ登攀】

「トンコさんお帰りなさい。日本はどうですか」。

「日本は暑い」。この言葉は昨今の夏の猛暑現象のことをいっているのではなく、私に劔岳の素晴らしさを教えてくれた佐伯富男さんが1957年の第一次南極越冬隊から帰国して劔沢小屋で会ったときに彼が発した言葉。

佐伯という姓は立山芦峯寺（あしくらじ）ではほとんどの家の姓。だから芦峯寺に行って、佐伯さんの家は？ と聞いても通じない。彼は第一次南極越冬隊のメンバーで設営係。当時北海道大学農学部助教授。

それはそれとして、私に山登りの心構えを教えてくれた高校山岳部のリーダーだった心友の富岡隆と初めて劔岳に登りに行って、劔沢小屋に泊まった時世話をしてくれたのが富男さん。劔沢小屋のおやじさんも佐伯姓（後日知ったが富男さんはおやじさんの娘婿）。ニックネームは「トンコ」。謂れはトミオという言葉とその風貌が優男（金子治雄《S41 年卒》）に言わせると「女、男」：女のような男の意味）に見えることから来ているらしい。しかし、岩登りのテクニックはピカイチ。

「ミヤさん、今度はどこに登る？ チンネもいいぞ」。

「俺たちで登れるかな」

「あいな、西堀（栄三郎。第一次南極越冬隊長）さんは、《やる前からグダグダ言って何もしない奴は、一番つまらぬ人間ダ》が口癖だった」。

「だから俺はペンギンの生態を観測した」

西堀さんの言葉がどうしてペンギンの生態観測になったのかわからなかったが、黙って聞いていた。

「じゃ、チンネにしようかな」

「じゃ、とはなんだ。俺が案内してやる」

「それなら心強い。お願いしていいですか」ということでチンネに登ることになった。（因みにチンネに初ルートが引かれたのは昭和3年（？）西堀さん達旧制三高のメンバーによる）



中央チムニールート

知っての通りチンネ登攀ルートには、左ルートと右ルートがある。その時自分たちが選んだのは左ルートの中央チムニールルート（後でわかったのだが）。ホールドは豊富だが高度感がすごい。（滝谷、前穂東面に匹敵する）それでも岩が堅く初めてのチンネルートとしてはお勧めルート。トンコさんを確保するには我々の技術では心もとない。それでも安心感があったのは彼に対する絶対的な信頼感があったからだろう。それまで岩登りの経験が浅かった私にとって頂上に達したときの気持ちは言葉には表せなかったが“これで登らなくていいのだ”ということだけは心に残った。富岡もあとで同じ気持ちだったと言っていた。

10 時間後に劔沢小屋に戻った時は言葉もなかったが、じわじわと喜びがわいてきた。トンコさんはにやにやしているばかり。

【ニードル登攀】

4 学年の夏山合宿に日程が合わず、どうしようかと思っていたところ東（37 年卒ニックネーム：アペ）と劔岳ニードルに登ることになった。アペと杉山（故人 35 年卒）が合宿の帰りに劔沢に来て合流することになり劔沢小屋までは一人旅。彼らがテントを持ってきたので劔沢テント場に張る。杉山は岩登りをしないので本峰を登った後はテントキーパー。私とアペはニードルに向かう。

ニードルはその名の通り針のようにとがった岩峰。ただ、見た目ほどルートは難しくない。頂上は畳 2 畳（約 6.6 m²）くらいの広さ。立っていると緊張する。「ミヤノさん、東京はどちらですか」とアペ。

「なんだ、東京の方角か？」「こっちだな。何をやるのだ」。



【左】チンネ 【右】ニードル

彼はおもむろにズボンのボタンをはずし、コキジを打ち始める。「なんでコキジを打つんだ？」と聞くと「合宿のあと劔のニードルに行くと言ったら、後輩が頂上でコキジを打ってきて、と云うからなんですよ」（今は公衆衛生上真似をしないでください。また最近ではチンネ、ニードル、三の窓の辺りは、幕営指定地になっていなくてもマナーをわきまえないクライマーが放棄するゴミが多く見られる事態になっているとの話を聞いている。美しい景観を保つ心構えを忘れないでほしい）。

なお、アペは、昭和 30 年代の山の会メンバーではバランスが一番良かったと思う。

劔沢のテント場で面白い経験をした。朝目が覚めるとテントを開けて、どこか撤収するパーティがいらないか探す。いるとそこに行って残りの食料をもらう。ニードルに登りに行った時、杉山がどこかの女子山岳会が撤収しているのを見てコメ 3 升（約 5.4 kg）くらいもらってきて劔沢小屋に持っていき、500 円で売ってきた。次の日小屋に行ったらトンコさんから「昨日のコメ灯油臭かったぞ」「すみません。お金返しましょうか」「いいよ。カレーだったので誰からも文句が出なかったからナ」。

昭和は良き時代だった。 Stay hungry, stay foolish (Steve Jobs の言葉) , and “stay brave” (これは私の言葉) おわり

(3) 齊藤雄二 (S41 年卒) 劔岳北方稜線の思い出 (1965 年 5 月厚生部・部山行)



私、齊藤雄二が、稲門山の会の役員を始めたのは、定年退職後、1 年先輩の井村英明 (S40 年卒) さんから、OB 会を手伝ってくれと言われて、最初のお仕事は、記念誌「早稲田大学山の会五十年の歩み」の作成に参加したことでした。記念誌は 2006 年の 11 月に完成し、その後 OB 会で、新井昭夫 (S46 年卒) さんから、稲山会通信の編集を引き受け、19 号 (2009 年 7 月 10 日発行) から 41 号 (2020 年 7 月 1 日発行) まで、デジタル化は島田弘康 (S46 年卒) さんをお願いし、延べ 11 年担当しました。この間の成果として通信のカラー化があり、島田さんのご尽力で、実現しました。こんなキャリアがあるので、現編集者から通信 50 号の記念に「山の会の心に残る山行を投稿してほしい」との依頼があり、かつて、厚生部・部山行で走破した 5 月連休の「劔岳北方稜線の思い出」を報告することに致しました。

私達が現役の頃、早稲田大学山の会には「大衆性と研究性」という素晴らしい理念がありました。山の会の創設者たちは天才かと思わせる素晴らしい理念です。この理念に沿って、4 つの研究部がありました。厚生部・地歴部・生物部・気象部 (順不同) です。

私が所属したのは厚生部で、4 年間に 2 度、「とかげ」という部報 (A4 : ガリ版刷り) を発行しました。この中に私の「劔岳北方稜線の思い出」があり、今回 60 年ぶりにご紹介させていただく次第です。これは思い出であって記録ではありません。記録は会誌「やま 11 号」にあります。劔岳北方稜線は、戦後の大学山岳部の厳冬期の標的であり、早稲田や明治が踏破しています。伊折で餅を搗き、合宿の食料としたとあります。山の歌の古典、早稲田大学山岳部の「劔岳の歌」はこの頃作られています。

厚生部の劔岳北方稜線山行の参加者は齊藤雄二 (政経 4 年・リーダー) ・海野俊夫 (商 4 年・サブリーダー) ・渡辺征二 (理工 3 年) ・藤井栄一 (政経 3 年・2 年部員) ・迫田泰敏 (政経 2 年) ・三原一郎 (法 2 年) で令和 6 年 9 月現在、海野・迫田の両名は鬼籍の人となりました。

☆ プロローグ

5 月部山行の総括的反省を書けとのことだが、北方稜線はもうすでに遠い思い出の中で美化されてしまっている。今、殊更つまらぬことを反省するのも嫌なので、ここではあの稜線の強烈な印象を手繰り寄せながら、思いつくままの事を書かせてもらいたいと思う。劔の北方稜線を初めてみたのは、新人の時の夏合宿、後立の鹿島槍・赤岩尾根を死に物狂いで飛び出した時である。黒部を隔てて黒々と輝く巨大な山容に、俺の心は圧倒されたのを憶えている。北方稜線のコルの一つ一つが、まさしく窓に見えたのもこの時。雪の北方稜線を見たのは、春山合宿 (1964 年) 唐松岳アタックの時。鹿島槍アタックメンバーから外されて、落胆した気持ちで向かった唐松だったが、毛勝に続く稜線を見て、そんな気持ちは吹っ飛んだ。燦々と光り輝く陽の中にボワーンと青白く浮かび上がる劔の稜線が、神々しかったのを憶えている。北方稜線を真近に見たのは、昨年の 5 月部山行 (劔沢定着)。本峰から北を望んで、このやせたギザギザの稜線を、自分達の力で歩けたら、さぞかしすばらしいことだろうと思った。ある意味でこの稜線は俺にとって夢だったのだが、この 5 月部山行以来、「来年は北方稜線を」というのが、既定の事実となっていた。

☆ 出発前

然しながら春山も終わり、本年の劔部山行が現実のものとして、自分の前に現れてくるに従って、何か不安な気持ちに襲われてきた。ルート研究もザイルワークもある程度やってきたつもりだったけれど、地形の複雑さと、雪稜は何か対象として、自分たちの力以上という気持ちになってきたからだった。けれど劔という山は、意気と力でぶちあたるという考えもあり、頭の中であれこれ考えるより、一つあたってみること、そして危険だったらすぐ退却すると考えることの方が、事態が逆転するのではないかとも思い、それを自分に言い聞かせてみると、真似事であってもパイオニアワークとしての山行に、誇りに似た気持ちが起こり、又 5 月の劔の開放的なムードが心を占めて、どうやら心の統一は出来てきた。



劔岳北方稜線の春・唐松岳から 齊藤 OB 撮影

☆ いざ出発

上野のホームは例の如く満員。「黒部」に乗り込むと、隣は楽しい女の子達。かわいい娘さん達が色々話しかけるが、明日からの山を考えると、楽しい会話も途中で終わる。俺も何も不安のない楽しい旅というやつを、やってみたいという感傷に落ちいった。

☆ 第1日（4月29日）

伊折は雨。冷たいムードの中、馬場島までトラックで。馬場島にて少し考えた後、行動開始。ビショビショの雪の道のりを雨と共に歩む。こんな時にも行かねばならない至上命令が出るから妙だ。ブナクラ谷は深くて大きい。右手に赤谷尾根があるはずだが何も見えない。歩いて、歩いて冷える心と体を如何せんと思いつつ、コルに出る。雪量多し。

☆ 第2日（4月30日）

沈澱。雨だ。迫田が鍋をひっくり返して火傷する。1年間の教育が怠慢だったかと反省する。午後、海野・征二・藤井を偵察に出す。

☆ 第3日（5月1日）

快晴、天気は2, 3日必ず持つ。迫田の足もどうということなく、安心する。昨日のトレースを辿り赤谷山へでる。突然前方に本峰を見て驚く。「これが劔って奴なんですね。赤谷山から見た」。恐怖に似た感激で、体がぞくぞくする。最初は山の指摘だ。左から池平山、小窓、高く小さく池ノ谷のコル、中に小窓尾根・劔尾根、右へ早月尾根、その後ろに本峰。小窓尾根側壁とチンネが黒いが、あとはすべてが白銀。空の青さととのコントラストが又良い。さてこれを如何に料理するか？ どう登ったらよいやら皆目見当がつかないというのが実感だ。赤ハゲ、白ハゲを越えて、やっそこさ大窓へ出る。



赤谷山にて 右から齊藤、海野、渡辺、三原、藤井、迫田 OB



劔岳北西面の全容 渡辺 OB 撮影

☆ 第4日（5月2日）

快晴、大窓を後に池の平山に登る。途中かなり困難な登りあり。征二は急な斜面でもスタスタ行ってしまうので、注意する。この男の弱点は人を顧みない点か？小窓へ降りて小窓尾根に出る時、大きな急斜面を直登する。5月の陽光で、斜面はガラガラ光る。「小窓の王」の岩壁がかなりでかい。これを右にまいて三ノ窓へ下る。このルートは最高に気持ちが良い。三ノ窓への下降では100mのフィックスを張る。征二がよく働いてくれたが、新人さん方（新2年生）は若干オタオタした。三ノ窓にてチンネを見る。良し。左稜線、中央チムニー、中央バンドが顕著に白い。夜、俺と三原でつまらぬ口論をする。俺たち2人に余裕がなかったとは思えないが、やはり緊張の連続がこうした事態を招いたのか？信じていた三原に反駁されて、何か侘しかった。これが大きかった。夜半より風雪。



三ノ窓の天場 渡辺 OB 撮影

☆ 第5日（5月3日）

標高3000m近いところで、でっかい低気圧（1004mb）に襲撃された。テントは揺れる。降雪量が多い。若干斜面のところに幕営したのが気になる。時々外に出てみるが、やはり気になる。上には日大の山岳部が、下には京都の山岳会が幕営している。どうやら同じ穴のムジナだ。10時過ぎ、八幡製鉄の山岳部が、暴風雪の中、池ノ谷を下って行く。是か非か？風雪は強まるばかり、除雪の連続。窓の中央に幕営した雲稜、ベルニナ等が羨ましい。連中からは歌まで飛び出してくる。こちらは死に物狂いなのに。夜、風雪つもの。白岳（後立）のコルにおけるあの嫌なテント埋没（昨年の春山合宿）を思い出して、気が滅入るがシュラフに入る。ナイフは手の届くところ。夜半、征二が「危険だ」飛び起きる。雪がテントに当たって、ザーザーという不気味な音を立てる。あたかも雪面が落ちているかのように。死の恐怖を肌で感じながら外へ出てみる。異常なし。1時間後藤井に起こされる。同様の事。特に異常なし。やや恐怖心の吹き込み過ぎか？靴を履き飛び出せる体制を整えて、再びシュラフへ。

☆ 第6日（5月4日）

天気は一向に変わりなし。除雪、除雪。雪は湿っているので、まさか落ちないと思うが、条件は白岳の斜面に似ている。悪夢は付きまとう。10時、風雪やや弱まる。昼過ぎ、風雪ともに止む。安堵。1昨夜半からほぼ2日、2m近い積雪。テントは完全に雪の中。三ノ窓は谷間だ。午後4時陽が出る。どんどん晴れる。解放。どのテントからも一斉に歓声がわき、人は外へと這い出す。色々互いに語り合い、ここに一つの連帯感が生まれる。真っ白いチンネ、まさしく白い城壁、左は後立、右は劔尾根、同様に真っ白。後方の小窓の王の岩壁はハングっているので黒い。黄金色のアーベントロートの極美、これらは三ノ窓の人間だけもの。そして一瞬のはかない美であり、歓びであっても、これは厳しさに耐えた者への神の贈り物。そして今、自然が唯一の神。



晴れる小窓王 渡辺 OB 撮影

☆ 第7日（5月5日）

快晴、掘り出しに苦労する。ピッケル1本どうしても出てこない。どうしたのか？ ピッケルをテントのペグ強化に使ったので、管理が甘くなった？ 然し2mの雪では余りに相手がでかすぎる。開放感が一瞬しぼむ。けれど出発。リーダーの俺が責任を取り、ピッケルの代わりにスコップを持つ。懐かしの三ノ窓よサラバ。池ノ谷のコルはクラストした斜面を慎重に昇ると出る。ハッ峰も昨年の比ではなく困難そのものに見える。下では幾つかの雪崩が見える。左に剣沢を眺め、そのままピークへ。歌をうたって互いの労をねぎらい、しばらく休息後コースを変更して早月尾根を下る。下りの大半は尻セードで快適である。雪質によるが、歩くより安全なことを知った。間もなく馬場島へと出、そこで我々の辿った北方稜線を、勝利を胸に秘めながら、眺める。さてここからは今までの互いの規律と山の束縛を離れて、一般的な人間として社会に帰ることとなる。がここで人間様の余りに人間的な事実を知らされた。小窓にて女性パーティー5名の死、その他行方不明数名。不幸を直接聞き、我々の安全を殊更幸せに感じ、開放感に浸りつつ富山へと急いだ。



池の谷前のコル 渡辺 OB 撮影

☆ エピローグ

喜びなんかすぐ忘れる？ 帰りの汽車はしごかれた。連休前後ではあっても人間をすし詰にして、物体として運ぶ現代文明は人間的な喜びなんぞは抹殺してしまうらしい。そのことは一応置くとして、俺達は無事家に帰り、部山行は終了した。家でニュースを聞き、多くの山岳遭難を知り、我々の無事であったことを一層強く感じた。「勝った」というような意識もあった。さて人は一生で死を実感する機会はどのくらいあるのだろうか？ それはわからないが、少なくとも俺達はまさしくそういった状況に直面した。山では肉体的な苦痛と同時に精神的な苦痛があり、そうしたことが山を哲学的に考えさせるのであろうか？ そういった機会の稀に見るものを、この山行で与えられてきた。俺達はこうした経験を貴重なものとして、大切にしたいと思う。現代社会では個人の死がその人間の解放であると考えられなくもないが、俺達の生活をしてゆく基盤の中に、強い連帯意識がある以上、死は人を悲しませる。そういった意味で死には積極的なものは何もなく、あるのは悪だけだ。人間が命を全うせざるはやはり悪である。俺達は自分達に与えられた一つの機会に忠実であり。そしてその結果死という束縛から解放された。これから何かを掴んでゆこう。北方稜線は冷たい印象で始まり、それが明るい行動の悦びとなり、次に抵抗そして最後に幸せな勝利で終わった。この山行に何らかの積極的な意味づけをしてゆきたいと思う。

< 終り >



北陸道から剣岳北方稜線を遠望。池平山、小窓尾根、三ノ窓が見える。：斉藤 OB 撮影

(4) 西山一夫 (S48 年卒) ベトナム最高峰ファンシーバン山 (3143m)

昭和 48 年卒業の西山です。

最初に、地方にいることを理由に会の運営に協力していないことお詫び申し上げます。在学中にパキスタンのヒンズーラジ遠征隊に参加させていただきましたことに感謝をするとともに、森田、豊田、須田の 3 人の先輩の皆様には大した登山経験のない私に貴重な体験をさせていただいたこと心からお礼申し上げます。

パキスタン、アフガニスタン、インドを放浪したいろんな体験から、また、親の希望もあり、卒業と同時に故郷山口に帰郷し公務員生活をスタートしました。

登山は、山口県山岳連盟、宇部山岳会に所属し、フィールドを中国、四国、九州の山々に移し、時折アルプスの縦走、RC も楽しむとともに、海外へも、マッキンレー、レニア山（米国）ロッキー、ヨセミテ（米国）ニュージーランドに足を延ばしてまいりました。

結婚、子育て中は自粛しておりましたが、ひと段落した後は、体力に合わせて隣国である韓国の山々を訪れること 100 回を超え、韓国人以上に韓国の田舎を知っていると韓国の友人たちから言われておりました。

今回寄稿させていただいたのは、ベトナム最高峰ファンシーバン山 (3143m)。山口県山岳スポーツクライミング連盟、宇部山岳会創立 70 周年記念の登山で、コロナの直前に行ったものです。

地元紙 (2019 年 12 月宇部日報に 4 回連載) に掲載されたものを報告書とした関係上そのまま寄稿させていただきました。なお、執筆者の西村氏 (明治大学山岳部 OB) の了解は得ております。

ちなみに 4 枚目の写真の中央が私です。

最後に、会の益々の発展を心からお祈りいたします。ご興味のある方は私の所属会の HP を見ていただければ幸いです。

山口県山岳スポーツクライミング連盟顧問

宇部山岳会名誉会員

早稲田大学校友会山口県支部副支部長 (商議員)

宇部・山陽小野田稲門会会長

西山一夫



ベトナム最高峰ファンシーバン山 (3143m)

ベトナム最高峰 ファンシーバン登山紀行 西村 亘 (宇部山岳会県連盟顧問)

1948 年 9 月に山口県山岳連盟 (現県山岳・スポーツクライミング連盟)、翌年 1 月に宇部山岳会が創立され、この度 70 周年を迎えることができた。昭和と平成が終わり、新たに令和の時代を迎えた中、登山隊の私たちは山岳会の創立時期とほぼ近い昭和の時代に生まれ育ち、そして仕事に励みながら登山に没頭してきた。

あの時代の体力は若干衰えたが、気力と経験は旺盛だ。振り返ると、山行環境も決して恵まれたものではなかった。アルプスは遠く、地方都市では先端に行く機 械的な装備の入手は困難で、高価な物だったが、山行に対しては常に先鋭的な気概をもっていた。

記念事業として、古希を過ぎた者、あるいはこれから迎える者が、懐かしい山行の思いを一つにインドシナ半島の最高峰で「インドシナの屋根」の異名を持つ ベトナムのファンシーバン山(標高 3143m)に挑んだ。

隊員は▽隊長：西村亘(県連盟顧問、宇部山岳会)▽チーフリーダー：西山一 夫(県連盟副会長、宇部山岳会会長)▽サブリーダー：坂口仁治(県連盟副会長、周南山岳会会長)▽隊員：山根正弘(県連盟監事、宇部山岳会監事)、河野邦彦(宇部山岳会理事)の 5 人。平均年齢は 68 歳。10 月 31 日から 8 日間の遠征だったが、全員が登頂した。

ファンシーバン山は富士山(標高 3776m)より低い。山城はベトナム北部のラオカイ省とライチャウ省の境で、富士山が霊山として崇められているのと同じく、ベトナム人には特別な山のように。

かつては登頂に何日もかかっていた険峻(けんしゅん)な山だったが、2016 年に標高 1600m の頂の街サバから山頂直下まで全長 6283m のロープウェーが完成した。標高差 1410m という規模ながら、わずか 15 分で 3000m の稜線(りょうせん)まで簡単に行くことができるようになっていた。

さらにケーブルカーを乗継ぎ、手軽に山頂に登ることができる。それだけに多くの一般観光光客でもサバの町から気軽に登れるようになっていた。もちろん私たちは、以前から徒歩で登山していた険峻なルートに挑戦した。



険峻なファンシーバン山系

1 日目は、首都ハノイから約 300 キロを 7 時間かけて、サバに到着した。2 日目にはムオンホア溪谷や付近の山村を巡る 8 時間のトレッキングを敢行。中国との国境に近いサバにはザオ族、タイ族、モン族など色とりどりの民族衣装に身をとった少数山岳民族が今も多く暮らしている。

フランス植民地時代に避暑地として開発されたという歴史もあり、町並みはどこかロマンチックだ。一方、世界で最も美しいとされる棚田の見学や少数民族との触れ合いでは厳しい生活環境を垣間見るなど、さまざまな体験を満たしてくれる不思議な地域だった。

3 日目は、いよいよサバのホテルから車でホアン・リエン国立公園の登山口チャムトンゲート(標高 1950m)に向かった。私たちの登山隊は山ガイドとポーター 3 人を加え 9 人編成。事務所で入山届と許可書の手続きを行った。

3 人のポーターは龍の背負子(しょいこ)に水、食料など約 30 キロを担ぎ、はだしにゴム草履といういでたちで、先行した私たちを追い越した。確かな足取りは、まさに子どもの頃から鍛えられた山岳民族である。おかげで私たちは、マット、雨具、衣類な個人装備の 10 キロ程度で済んだ。

小雨の中、雨具を着用し、溪谷沿いにアップダウンを繰り返して 2200m 地点の山小屋(キャンプ 1)までは 3 時間の登行だ。そこでは、ポーターがベトナムサンドイッチのバインミーと果物を用意してくれた。昼食と休憩は新たなエネルギーを生み、宿泊予定の 2800m 地点の山小屋へは順調な出発となった。

小雨で展望がない中で急坂と鉄はしごの登行が続く。時折、登山客に出会ったが、多くはヨーロッパ人だった。3 時間半かけ、3 棟もある立派な山小屋に到着した。私たち 5 人には山小屋にしては立派な鍵付きの個室が提供され、小屋内には水洗トイレもあった。

十分なベトナム料理に加え、山岳ガイドからのホットワインの差し入れ雨にぬれた体を温めてくれた。ビールも買い求め、異国の山小屋でのひとときを楽しむことができた。天気が回復しないので山頂でのご来光を諦め、翌朝は午前7時の出発をガイドと確認した。



標高 2800mの山小屋に到着→

いよいよ山頂への挑戦である。必要最小限の装備で、寝袋などは小屋にデポ(残置)した。3人のポーターはこれから先へは同行せず、ここで待機となる。相変わらずの小雨の中、それでも晴れ間を期待して、雨と粘土質の滑りやすい土と岩、長い鉄はしご、ガレ地帯を登行し続けると、2時間でロープウェイ駅の稜線(りょうせん)に出た。

何と立派な駅。まるでドーム球場のようだ。中に入ると、標高 3000mに建っているとは思えない観光施設である。一瞬、苦勞しながら2日間をかけて登ったことに違和感を感じたが、ロープウェイを利用する観光客の中にあって、泥と雨にまみれた登山姿は私たちだけで、少し誇りを感じる充実感もあった。

山頂までは、観光施設と2017年に完成した壮大な仏教施設が続く。600段を超える階段を登ると、山頂である。観光客であふれ、所狭しの中で登頂写真を撮るのは至難の業だ。歩行登頂した私たちには、山岳ガイドから個人名宛てのベトナムの登頂証明書とメダルが交付された。

この日は標高 2800m地点のキャンプ2を経由して、一気に宿泊予定地のキャンプ1(標高 2200m)まで下山予定である。少しずつではあるが晴れ間が見え始めたものの長居はできないので、再び登山道に入る。急な傾斜を慎重重に下ると、オーストラリア、ドイツ、マレーシアなどの数パーティーに出会ったが、最後まで日本人に会うことはなかった。予定通り、昼過ぎにはポーターが待機するキャンプ2に到着。



用意されたパインミーの昼食を取った後、デポした荷物を整理して、キャンプ1に向けて再び下山を開始した。ようやく天気が回復し、ファンシーパン山の全貌、ラオスと中国の国境の展望を楽しめた。

1日の長い行程を終え、無事にキャンプ1に到着した。夕食はあり余るベトナム料理と果物、差し入れのワイン。腹と心の満足感で深い眠りに就くことができた。

ベトナムに入ってから5日目。山中行動の最終日はサバの町に向けた出発である。登って来た道を考えれば、さほど困難ではなく、3時間程度で十分と考えていたが、とんでもなかった。標高 2200m地点のキャンプ1を出て、20分ほどの分岐から整備されていないラフコースに入った。

まきにジャングルの中を山野をかき分けて進むのである。標高 2000m付近一の小広場を抜けると、急傾斜地の連続だった。ジェットコースターのようなダウンヒルの赤土傾斜もあれば岩場のコースもある。経験を積んでいる私たちでも相当厄介な山道であった。

これまでの整備された道とは全く異なり、踏み跡も少ない。ガイドのルート確認も必要だった。後尾から見守ってくれた山岳民族のポーターは重い荷物を背負い、ベトナム草履で実に巧みに下りる。三点確保が必要な岩壁もスルスルと下り、最後に駆け足となるのにはあざんとした。

ホアン・リエン国立公園のシンチャイビレッジに至るコースは、少数山岳民族が暮らす集落に出る下山道で、登山客はあまり通らないコースである。おかげで数カ所の少数民族の集落生活を垣間見ることができた。6時間の行動の後、昼すぎにチャーターした車でサバのホテルに帰った。

ファンシーパン山の登山は、体力が要求されるコースだった。平均年齢 68 歳の登山隊ながら、ほぼ示された標準タイムで全員が踏破できたことは、ガイドらから称賛された。全員が無事に登山活動を終了できたことに対し、協力を頂いたベトナムの関係者に感謝したい。

ハノイに戻り、ホーチミン廟、ホーチミン記念公園、ベトナム民族学博物館、文廟、鎮国寺、ホアンキエム湖、ボングセン水上人形劇などを見学。大勢のバイク族がひっきりなしに現れては消えていくさまからは、この国の勢いと生命感に満ちたエネルギーを感じた。=おわり=



厄介な山道を進むメンバーたち

(5) 小竹正雄 (S51 卒) 山の思い出



大雑把な性分からか山行の“備忘録”は持ち合わせておらず、昨今は物忘れも自覚し始めていますので、はなはだ心許ない限りですが脳裏に浮かぶまま、その断片をスケッチさせていただきます。

山登りのきっかけは、中学生の頃両親に連れられて登った「立山」でした。室堂から一の越山荘までの山道、自らのお米を持参した山荘、懐中電灯を頼りに登った雄山での御来光、天狗平・弥陀ヶ原辺りで道に迷い必死でルートを探したことなどが 60 年を経た今でも蘇ってきます。

昭和 40 年前後、県外への家族旅行など覚えがない中で、何故立山登山だったのかは両親とも他界した今となっては大いなる“謎”のままです。

高校では、中学時代のバレーボール（県新人戦で優勝、9 人制）を 6 人制のため諦め、山岳部に入部。夏合宿で槍ヶ岳、薬師岳に登っていますが、記憶に残るのは福井県と岐阜県の県境にある「夜叉ヶ池」（1099m）です。ブナの原生林に囲まれ神秘的で、固有種のヤシヤゲンゴロウ、クロサンショウウオが生息し、竜神伝説が伝わっています。（昭和 54 年に泉鏡花原作「夜叉ヶ池」が映画化され話題になりました。（監督篠田正弘、主演坂東玉三郎））

大学では、特に目的もなく時間だけが過ぎていた生活に踏ん切りをつけようと、入学後 2 カ月ほど経った頃に山の会に入会。しんどかったことは、入会最初のトレーニングで坂のある公園（？）で嘔吐したこと（後にも先にもトレーニング中に吐いたのは始めてでした。）、すっかりなまっている身体を思い知らされランニング等十分なトレーニングをして臨んだ夏合宿の南アルプス全山縦走で、ひたすら足元を見つめて一心不乱に先輩の後を追った両俣から北岳の

急登などです。

1972 年 10 月、常数さん・坂本さんとの八方尾根―唐松岳―餓鬼山―祖母谷温泉―樺平―阿曾原―仙人池―剣沢小屋（剣岳ピストン）の山行では、見事なまでの紅葉、唐松岳から樺平まで静寂さと山に包まれた感覚、仙人池からの剣岳ハツ峰の威容など、個人山行の楽しさを体感しました。南アルプス聖岳周辺の群生するニッコウキスゲ、冬山山行で徳澤園の天場から見た前穂高岳のモルゲンロートも良い思い出です。



夏合宿南アルプス全山縦走



仙人池から剣岳

事故に直面した場面は特別です。1974 年・RC 会山行前穂高での滑落、1975 年・春山山行聖岳頂上直下でのスリップ、当事者ではなかったものの 1972 年 11 月・雪上訓練の富士山五合目で、早朝当方のテントに近接していたテントが竜巻により吹き飛ばされ一名が死亡した事故などです。（当パーティーは強風下の行動中に目撃して直ちに引き返し、他の登山者と共に救助活動に対応。私は佐藤小屋で内臓破裂と思われる被害者を目の当たりにしました）



1975 年春山山行の聖岳直下



故郷の文珠山(356m)

近年最も身近な山は、拙宅から登山口まで車で 15 分余りの「文珠山(356m)」です。1 時間ほどの登りで、山頂からは遠くに白山、眼下には今年 3 月に県内まで延伸した北陸新幹線が見渡せます。清々しい早朝に登ったり、山頂でコーヒーを飲みながらゆったりと過ごしたり、体調の度合いを測るために早足で登ったりと、気分に合わせて幾度となく登っています。

振り返ると、山からは年齢・体力・体調・心持ちなどその時々状態に応じて、楽しさ・苦しさ・喜び・悲しみ・思い出など様々なものを授かったなあの感慨を改めて覚えています。

(6) 行方正幸(S50 卒) 甲斐駒ヶ岳の氷壁登攀

南アルプスの山々は北アルプスに比べてそれほど登っていない。それでも冬になる氷壁を求めて甲斐駒ヶ岳の黄連谷や八ヶ岳広河原沢にはよく通ったものだ。甲斐駒ヶ岳は特に好きな山で、過去6回も登りに行ったが、そのうちの4.5回(鋸岳は11月下旬)は雪山だった。

① 黄連谷右俣：昭和50年12月上旬(22歳)

岳友の結婚パーティーが冬の丹沢のキャンプ場であった。その時、黄連谷の氷壁を登って駆けつけた奴がいて「今年はバッチリ凍っていたよ」と言った。その時隣にいたICIスポーツのM君と週末に黄連谷右俣を登ることになった。

初日は出合いの白稜の岩小屋でビバーク。黄連谷出合の坊主滝60mは蒼々した大氷瀑になっていた。

ザイルを出したのは坊主滝だけ。後はノーザイルで氷の回廊と化した奥千丈氷瀑をワンプッシュで山頂まで抜けた。



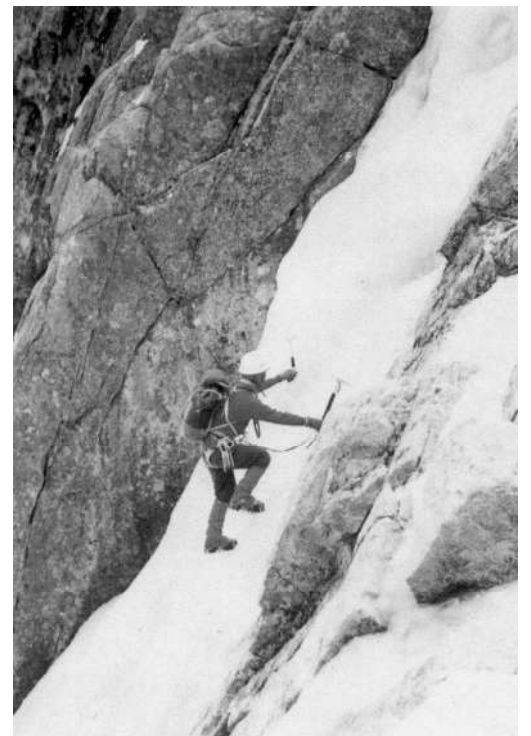
初冬の甲斐駒ヶ岳

② 甲斐駒ヶ岳・仙丈岳の単独行：昭和51年2月(23歳)

高校時代の友人と横浜～ナホトカ(船)～シベリア鉄道で欧州に出た。結構ハードな旅だったけど2カ月後帰国すると大学の学生課から呼び出しが来て母親が狼狽していた。

学生課に出頭すると「君はどうして追試の科目を間違えたんだ。卒業できないぞ。西原教授(12代総長)に謝って来い」と言われ、電話すると奥さんに「主人はドイツに留学に行ってもう日本にいませんよ」と言われ留年が決定した。追試の手続きを頼んどいたSが担当教授を間違えたのだ。

翌日、私は直ぐ冬山装備と食料を担いで、頭を冷やしに戸台から北沢峠に行き、甲斐駒ヶ岳と仙丈岳を登ることにした。その結論は、5年生の冬休みにはバスを乗り継いでシルクロードでも横断しようかなあと、いうものだった。



黄連谷右俣の奥千丈滝付近

③ 甲斐駒ヶ岳～鋸岳縦走：昭和51年11月末(23歳)

大学を留年し、就職も決めたので3年生の村田君と黄連谷左俣を登ることにした。雪崩が怖いので11月の最終に出かけると、暖冬で大雨になり、坊主滝はドウドウと水が流れていた。その日は登り返して七丈の避難小屋で少年サンデーを燃やしながら、びしょびしょ濡れ鼠の身体を温めた。

翌日、天候は回復してきたので鋸岳を縦走することにした。新雪で輝く甲斐駒の頂上を踏み、ザイルは大ギャップの懸垂下降のみ。夕方には角兵衛沢から戸台に下山した。



甲斐駒ヶ岳山頂にて

④ 黄連谷左俣(遭難処理)：昭和 54 年 12 月上旬 (25 歳)

父親の事業が倒産して、2年間、山にもどこにも行けなかった。就職して地元山岳会に入った最初の冬山は黄連谷左俣だった。

11 時 55 分新宿発の夜行列車に乗って日野春駅に降りるともう一組黄連谷を目指すパーティーがいたので登山口まで割勘でタクシーに乗った。前後しながら尾白川を遡上し、我々は白稜の岩小屋でビバーク。彼らは坊主滝を登ってからビバークするというので別れた。雪は少ないが坊主滝は剥き出しの大氷瀑になっていた。

翌日、坊主滝を登り、左俣に入って、チムニー滝(30m)を登り、100mの滑滝状氷壁の下に着くと、昨日タクシーに同乗した朝霧山岳会の二人が墜死していた。後から来た二人組と苦闘しながら四人で寒々とした氷の谷で二つの遺体を降ろし、坊主滝の上で焚火してもビバークで漆黒の闇が怖い。翌日警察に二人を引き渡した。



黄連谷の坊主滝 60m

⑤ 黄連谷左俣：昭和 54 年 12 月中旬 (26 歳)

遭難の翌週に再度 I 氏と黄連谷左俣に挑戦した。高野が「黄連谷左俣を登ればアルプスの氷壁も楽勝」と挑発的なことを言う。

先週とは違って変わり、雪が降って坊主滝はガラガラと白く輝く氷雪壁になっていた。雪が付着するとクライミングは易くなるが、逆に新雪の積もった沢の上部の雪崩が怖い。三度目の冬の黄連谷でもう様子は分かっていたので、アルプス流のスピード重視で出来る限りノーザイルで登った。

上部の 80m滝と 60m滝以外はザイルをつけずに登り、まだ陽光のあるうちに八合目の稜線に飛び出し、夜の闇に追われるように黒戸尾根を登山口まで駆け下った。

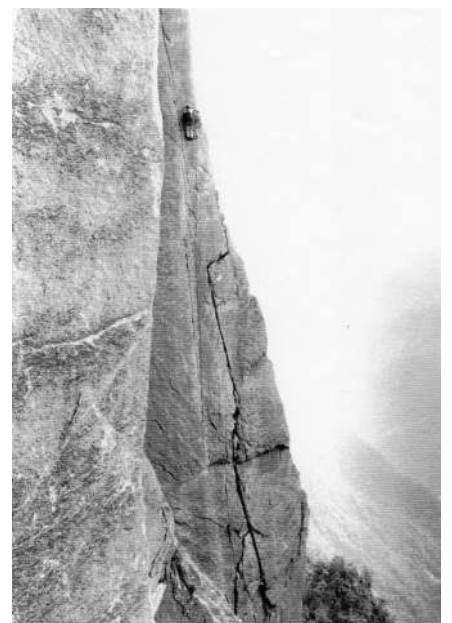


黄連谷左俣 60m 滝

⑥ 赤石沢 A フランケ～奥壁登攀：昭和 55 年 9 月 (28 歳)

ひと月後に岳友の H 君が結婚するので、登り納めにビッグルートに挑戦したいと言って来た。それで前々から登って見たかった、甲斐駒ヶ岳赤石沢の赤蜘蛛ルートを登ることにした。赤蜘蛛ルートは素晴らしい花崗岩の大岩壁である。隣の恐竜カンテを春日井山岳会の富士居孝明君が登っていた。新進気鋭の山岳写真家で右の写真は彼が撮影してくれたもの。(その後彼はメルーで遭難死)

その夜八合目でビバークしていると、横に走る猛烈なカミナリに何度も襲われて、怖しくて眠ることができなかった。翌日は B フランケを登るのを諦めて、赤石沢奥壁中央稜左ルートに取り付くも、雨でドロドロのチムニーが最悪で、上部の花崗岩はボロボロで、頂上に抜けた途端猛烈なカミナリに襲われ、必死に黒戸尾根を駆け降りた。赤蜘蛛ルートというカミナリ攻撃を思い出す。



赤石沢 A フランケ赤蜘蛛ルート

(7) 倉本 弘 (S52 年卒) ハケ岳の思い出



夢科山山頂 (2021 年 5 月)



冬の赤岳地蔵尾根から中岳と阿弥陀岳：行方正幸 0B 撮影

1973 年 4 月入学と同時に「早稲田大学山の会」に入会した。78 年 3 月卒業と時を同じくして苦勞のすえ刊行にこぎつけた会誌『やま 14 号』は、今では私の宝物になったが、そこに掲載された山行記録などを頼りに我がハケ岳について思うままに書いてみたい。

1976 年 2 月、同期の倉川秀明君と二人で厳冬期のハケ岳に挑んだ。阿弥陀岳南稜から北ハケ岳への縦走である。美濃戸口の手前の「学林」でバスを降り、南稜末端の取り付き、旭小屋の裏手からいきなり急登が始まるがラッセルはない。夏とほぼ同じペースで進むが、天候が崩れ出した。隣の御小屋尾根も判然としない。無名峰に飛び出すと風の唸りが倍加する。その先にも適当な天場がないので、少し戻ってツェルトを張る。翌日は悪天候につき沈殿。

前々日の無名峰まで登り返し、南稜の核心部に入る。P2 は下り気味に左へトラバースし、広河原三ルンゼの右股ツメのガリーに入る。P1 は、まず左にトラバースし、緩傾斜のリッジを上り、そこから右に巻くようにしてピークに出る。待望のピークなのに視界はすでに閉ざされていた。赤岳、横岳と主稜線をたどるにつれ、風雪が一段と増す。これではとても夏沢峠まで行けそうにないので、硫黄の石室にツェルトの張れそうな場所を物色し、吹き溜まりをのけてなんとか潜り込むことができた。一息つくるとタン屋根をたたく音がする。雨である。

予想に反して翌日は雲ひとつない快晴だ。硫黄岳のだだっ広い山頂に立つと、360 度の大展望が待っていた。鼻歌まじりに黒百合平へ。渋ノ湯では混浴のおまけがついた。

これは、私にとって 4 回目のハケ岳山行であるが、初めてのハケ岳は、高校 1 年の 1969 年 9 月、中学時代からの山仲間 3 人で、渋ノ湯から東天狗岳を越え、オーレン小屋で幕営後、翌日硫黄岳に登った。冷雨にうたれた山頂で赤岳登頂を断念し、夏沢峠から松原湖へ下った。2 回目は、73 年 5 月、新人として合宿初参加で、稲子湯から黒百合平、赤岳を経て、小淵沢駅までの 2 泊 3 日の山旅である。当時の新人合宿はこのハケ岳と谷川岳周辺が定番コースであった。2 年後の 3 回目は、2 回目とまったく同じコースをたどる、初めてリーダーを務めた新人合宿であるが、何も覚えていない。



写真は新人合宿（筆者左端） 1973 年 5 月 赤岳・阿弥陀岳をバックに硫黄岳にて

社会人となって永らく山とは無縁な生活が続いたが、2001 年に三鷹に転居したのを機に山が身近になった。中学・高校時代にかよった奥多摩・丹沢の峰々や、大学時代はいつも夜行列車で素通りしていた中央沿線の山梨の山々を気ままに一人で楽しむようになった。

さて 5 回目は、2020 年 9 月、51 年ぶりに同じ友と硫黄岳に登った。あのとき一緒に登ったもう一人の友が同年 1 月にがんで他界したので、慰霊登山を兼ねた。松原湖近くにある同行者の山荘から本沢温泉を経由する日帰り登山である。



写真左と右は硫黄岳のケルンの前で同じ友と（筆者左）。左は 1969 年 9 月、右は 2020 年 9 月

2022 年 9 月、急性大動脈解離で緊急手術を受けた。予後順調につき 2 週間で退院、仕事にも早々に復帰することができた。25 年 6 月末で 4 年の約束の勤務を終えた後、その間封印している登山の再開を心待ちにしてきたが、山がとても遠くなった。そのため私にとっておそらく最後の登山、6 回目の八ヶ岳登山となるのは、21 年 5 月の蓼科山である。

「山に登らなくなっても登った経験は素晴らしい財産です」という村田宣男代表（本誌第 49 号巻頭言）の言葉に意を得て今までとは違ったかたちで山を楽しめればと思っている。（了）

(8) 柴原 至 (S52 年卒) 記憶にない思い出礫山美術館



大学を卒業（昭和 52 年 3 月卒）してもうすぐ 48 年になります。今となつては当時の記憶も茫々としているのは仕方がない事だと思います。

しかし、卒業間際の山行をその 1 年後に全く記憶していなかったのはどうしてなのか、今でも不思議でしょうがありません。その事について書いてみようと思います。

その山行の記録は、やま 14 号（昭和 53（1978）年発行）に掲載されています。概略は次のようなものです。

① 新保高から表銀座へ 鹿間行喜

② 期 日 昭和 51 年 11 月 2 日～5 日

③ 参加者 名達一彦（前事務局長）、鹿間行喜（現役員）、柴原至（現会計担当）、

④ 行 程

11 月 2 日 神岡から新穂高へ。蒲田川沿いを途中偵察のためヤブこぎになり、3 時間の苦闘の末、槍平手前の二股へ。1 時間で槍平へ。天幕設営。

11 月 3 日 6 時過ぎ出発。中崎尾根の稜線に出る。ジャンクションピークへは左の岩稜を登り西鎌尾根へ出る。昼過ぎに槍の肩に到着。設営後槍ヶ岳へ登る。冷え込みが厳しい。

11 月 4 日 7 時過ぎ出発。天候は晴朗。大天井を過ぎ、槍ヶ岳小さくなっている。燕山荘天場についたのは 4 時半を回っていた。寒く寝られない夜であった。

11 月 5 日 一路中房温泉に下山。好天に恵まれ実に気持ちの良い山行であった。有明から穂高にて下車、手打ちうどんを食べ、礫山美術館に立ち寄った。

同期の鹿間君のレポート以外によく書けていて（本人に失礼か？ 読み返しても文章が生き生きしていて臨場感にあふれている。（やや褒めすぎか？）

しかし、このうち覚えているのは最後の礫山美術館へ寄ったところだけです。昭和 53 年当時は、卒業の次の年でありこの文集は当時の芝愛宕町の会社の寮で受け取ったと思います。

ただこの時、この山行のことはすっかり記憶から消えていました。同じコースを昭和52年冬山合宿で登った事は今でもよく覚えています。雪山のラッセルの厳しかったこと等。

なぜ1年前の山行は、礫山美術館へ立ち寄ったこと以外覚えていないのか。(礫山美術館に立ち寄ったのは鹿間君の発案によるものだったそうです)

それを確かめに、今回OB合宿の帰り(令和6年10月6日)に前代表の行方さんと二人で美術館へ寄ってみました。なかなか雰囲気のある美術館で、月曜日ではありましたが美術愛好家たちで混んでいました。そこにある彫刻のいくつかを覚えていました。一度着たことは間違いなさそうでした。

私たち2人はちょっと美術館の雰囲気に合わないような感じでした。(行方さんに失礼か)しかし山行の記憶は蘇りませんでした。

理由を考えてみました。

- ① 当時は就職活動も終わり、地元茨城の会社に就職するか、東京の会社にするか決めかねていた。(結局東京の会社に就職)
- ② 母親の末期がんが見つかり、就職問題と合わせて悩んでいた。
- ③ 鹿間君の記録にもある通りに初日から最終日まで天候がよく快適すぎて記憶に残らなかった。

実際の冬合宿では、山行の中でも雨に降られたり、雪山で吹雪かれたり、体調が悪くなって途中で下山したりした時のことは今でもよく覚えています。やはり最大の原因は③の理由ではないかと今では思うようになりました。いずれにしても不思議な思い出です。

最後に、会計担当役員として毎年会費を納めていただいている会員の皆さんに感謝いたします。また会費の値上げにご協力いただきありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。



(9) 本田伸樹 (S56 年卒) はるか昔の追想

～1978年GW穂高屏風岩：東稜・雲稜ルート：滝谷：クラック尾根・ドーム北壁～



1978年の旧人山行は集まりが悪くて、ゴールデンウィークは故宮垣秀章さんと私とで穂高岳登攀となりました。松本駅より今は無き乗り合いタクシーで上高地へ。河童橋を一瞥して横尾まで。横尾のキャンプ場にテンパりました。

【屏風岩東稜】

翌日5時に行動開始。登攀具その他を詰めたザックは結構重い。取り付きまでの一ルンゼは雪が詰まっていたアイゼンを付けての行動。

T4尾根の取り付きに着くと既に大行列。さすがゴールデンウィークの穂高です。これは大変なことになるぞと早、不安な気持ち。行列待ちで大分時間がかかってT4テラスへ。腐れ雪に埋もれ不安定な状態。T4テラスの岩壁の裾で雪洞を掘りビバークしているパーティーもありました。順番待ちを厭う気持ちも分かるし、落石が怖くてテントではとても寝られないでしょう。T2テラスへのトラバースが怖かったのですが上級生宮垣さんの前、弱音は吐けません。東稜取り付きでまたもや順番待ち。ただ屏風の垂壁が目の前に立ち塞がり、ものすごい威圧感です。1ピッチ目。若干のフリーから人工へ。簡単なアブミの架け替え。ただアイゼンを着けてアブミに乗るのは煩わしい。先行パーティーのノロノロ振りが気になります。核心部はまたしても順番待ち。登り切れるか不安です。

フリーと人工が混じり合う登攀でアイゼンを外すことはできないし、人工ではアイゼンが邪魔になるしで、複雑な気分です。人工は易しい垂壁のアブミの架け替えだけですがとにかく先が詰まっているので時間がかかります。とうとう日の長い季節の夕暮れが迫ってきました。これはいかんぞと気は急かされるも、先は進まず。とうとうルートの後半で暗くなってしまいました。それでも登攀は続きます。とにかく垂壁の途中でビバークなどできません。

着きました！とうとう終了点です。しかし終了から樹林帯の登りながら雪壁とも言える登路は激ヤバ。アンザイレンして進みます。最早これまで！漆黒の闇になってしまいました。ヘッドランプを付けて登攀を続けますがとうとう時間切れ。ツェルトの持参もないファーストビバークです。横木になった倒木に宮垣さんと腰掛け、ビレイを取り、なんとも不安定なビバーク点です。辛い一夜でした。夜半から雨も降りだすし、羽毛服もびしょ濡れです。ただ気温はそんなに低くありません。耐えるのみです。

翌朝は快晴。屏風の頭まで一気に登って、北尾根沿いの道を涸沢へ。横尾でしばらく甲羅干しの後、ベースを涸沢に移動。やれやれです。

【屏風岩東壁雲稜ルート】

先の東稜に懲りて2時行動開始。暗い中、第一ルンゼ出会い目掛けて降ります。T4尾根の取り付きは目論見通り第一番。スムーズな出だしです。



横尾のキャンプ場

雲稜ルートは取り付きから人工。ボルトが抜けていたりとかして、厳しいA1ですがなんとか乗り切ります。扇岩テラスで一休止。行動食などを口にし、登攀継続。ハングなどもありちょっときつい人工ピッチもあります。ただ先行パーティーも無く伸び伸びとした登攀を楽しみました。

人工登攀だけならグレンデと大差ないのですが、アイゼンを着けてアブミに乗らなければならないので、先にも言ったように、煩わしいアブミ操作です。

終了点から涸沢までは屏風の頭経由、三々五々の腐れ雪の中のお散歩。今日は良かったです。

【穂高滝谷・クラック尾根】

天候曇。涸沢のベースを出て北穂まで。結構なアルバイトに感ぜられます。B沢を降り、クラック尾根取り付きへ。リッジ状を上り尾根へ。ジャンケンクラックはアイゼンを着けた足が入らず、左壁のフェースをアイゼンの前爪を頼りにホールドを探して突破。そこからはⅢ～Ⅳのピッチが続きます。夏に一回登っていたのですが、アイゼンを着けていると結構、難しく感ぜられます。あとピンが抜けていたり、冬場の氷結でリスが開いてハーケンが緩んでいる箇所もあるので要注意。

昼前に北穂小屋の脇に飛び出しあっけなく終了しました。クラック尾根はクラシックルートで冬場の登山者も多い為、ピンの数も夥しいのですが、その全てが安心できるものとは限らないので、注意が肝心です。

【穂高滝谷ドーム北壁】

最終日はきついことしないでのんびり遊ぼうよ、ということで、滝谷ドーム北壁に登攀。フェースのアブミの架け替えだけに終始する単純なルートです。

ここで色々、宮垣さんから人工登攀のご指南を受けました。もたもたすると「本田は人工が遅い！」と叱咤の声が飛びます。半日しごかれて帰幕。取り敢えず涸沢のベースに帰りつき、その晩は涸沢で幕営していたパーティーが夜間にテントで酒宴していて騒いでいたのを、堪えかねた同志会のメンバーが涸沢の岩でそのパーティーのテントを潰したなどの話題で、宮垣さんと盛り上がりました。

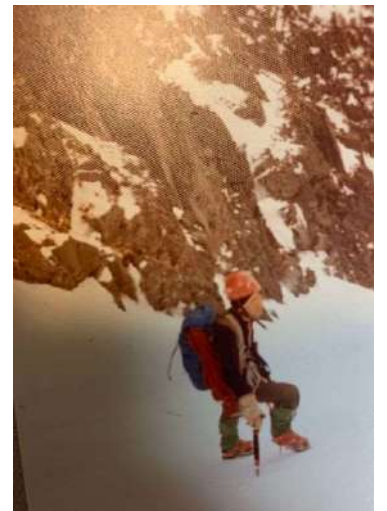
翌朝、テントを撤収して、上高地まで下山。上高地では、我々は気軽な観光客と同様の気分でした。



涸沢のキャンプ場



涸沢で遊ぶ



行くぞ 滝谷！



北穂から奥穂高岳を登む

(10) 井上隆則(S56 年卒) 劔岳池ノ谷小窓尾根側壁冬季新ルート開拓



1986 年発行の「クライミングジャーナル 23 号」に、冬の劔岳池ノ谷小窓尾根側壁新ルート開拓の記事が掲載された。藤原雅一君ら雲表倶楽部パーティーのビッグクライムだった。

彼とは三つ峠や冬の北尾根などで知り合いだった。当時、海谷や甲斐駒の数々の初登攀の記録を「岩と雪」や「クライミングジャーナル」に発表していた。このパーティーに山の会OBの「井上隆則君」の名前を発見し、これは凄いとビックリした。おまけに、この池ノ谷初登攀の記事は「岩と雪 116 号」にも取り上げられ、積雪期の劔岳入山規制の運用に一石を投じた登攀でもあった。これを登山史の中に埋もれさせる訳にはいかない。稲山会通信第 50 号の「備忘録」の有終の美を飾る山として(抜粋)を取り上げたものである。(行方正幸)

(クライミングジャーナル 23 号抜粋)

1986 年の冬、富山県はかなり天気がいいらしい。雪はきれいに固まっているし、馬場島に着いた時は登攀成功を確信していた。しかし小窓尾根は殆んどトレースは無く、ラッセルと重荷に苦勞し、三ノ窓着いたのは 30 日夕方であった。それまでの好天がうその様な雨混りの風の中全身ズブヌレて雪洞を掘り温い紅茶を飲んだ時には流石にホッとした。4 時の気象通報で天気図を作るが、日本周辺に低気圧が 3 つもあり、31 日の天気は大荒れの模様である。また長期予報は、西高東低の冬型と日本海低気圧が交互にやって来るとの悲観的な情報しかない。

31 日は雪洞の中でトランプをしてステイ。しかしその夜、何として明日は登ろうと決意する。ドーム壁はこの天気では無理なので、まずは手頃な壁と言う事であれこれ考える。チンネに登るのもいいがートを拓くのはどうだろうと藤原君が言い出す。いつもながら彼の登攀意欲には感心される。幸いギアも食料もルート開拓できる程充分にある。よし、明日は新ルートだ。1 日は 3 時起床。昨夜かなりの降雪があり、雪洞の入口は埋っている。朝食に僕の好きな博多ラーメンを喰って雪洞出ると予想通りの風雪である。早くも濡れたザックやミトンバリバリ。

池ノ谷を 100 メートル程下ると、台形状岩壁の下へ着く。と言っても視界は効かず、岩壁の下にいるらしいぐらいしかわからない。上部がどうなっているのか良くわからないが、とにかく登ろうと、雪壁を 1 ピッチ登る。ハング帯が広がっているが弱点を突けばフリーでも何とか越せそうである。この風雪の中ではボルト埋めるのは最小限にしなければならない。左上する雪のバンドを、藤原君がダブルアックスで越す。左手に雪の詰まったチムニーが見える他は垂壁である。中の雪をかき出しながらの登攀は厳しく、プロテクションを取るのに苦勞している。帰ったら富山で旨い麺を食おうの合言葉で、1 時間程ビレイすると、やっと「登ってこい」の

コール。もうすでに僕の足の指から感覚は無くなっている。

4ピッチ目からは僕がトップ。右へと言う藤原君の意見を見捨て、左へ40メートルのトラバース。全くプロテクションが取れず、冷や汗の40メートルである。上を見ると、ハングの切れ目が見えて来た。ハーケンとフレンズでビレイポイントを作る。おかしな物で、トップを登ると足の冷たさなんか忘れてしまう。

次のピッチ、またも左上気味に40メートル登る。中間部の垂壁はいやらしく、大きめのクラックにアイスハーケンを無理矢理たたき込むが、ほんの気安めである事は百も承知である。危険な処では落ちた事の無い強運を信じ、スタンスは見ない。アイゼンの先がかかった所がスタンスである。強引に突破してハング下のクラックにアイスハンマーを突っこんで、不安定なビレイ。もうこのハングを越せば終了点である。

最終ピッチは「冬山は爆発だぁ!」がログセの井上君にゆずる。「絶対に落ちるなよ! 東京でお好み焼をおごるからな」と言って送り出す。ハングを左から廻り込んで抜ける迄は調子が良かったが、その先でルートファインディングに苦勞しているらしく、右へ行ったり左へ行ったり。僕達は「日高の根こんぶ」をしゃぶりながらスノーシャワーに耐える。ザイルに導かれて登ると小窓王が右手前方に出た。終了点だ。つらい風雪の割にはあっけない終了である。「元旦に新ルートを拓くなんて最高だね」と固い握手。

2日は雪洞の中でトランプ。2時間おきに除雪をしないと雪洞が埋ってしまうのには参った。3日は天気がいいが、その後は大雪のおそれがあるとの情報に、一同がっくり。好天の望みがあれば15日迄粘ろうと思っていたがこの先1週間は駄目のようである。結局、3日の好天を利用しての下山に決定。

10日分の食糧をかついでの下山はつらかったが、劔岳山頂は晴れで感激もひとしおであった。途中、東京岳人倶楽部の事故があり、冬山の無情さを感じる。単なる遊びにしては余りに高価な物を賭けているのではないだろうか? 我々も死神がすぐ傍を通り抜けて行くのを気付かずに居たのではないだろうか? 劔に散った若きアルピニストに合掌。(雲表倶楽部:山川洋一)



【特集Ⅱ：2024 年山の記録】

(1) トムラウシ山クワウンナイ川遡行

①日程) 2024/8/11-13

②メンバー) 齋藤壮呉 (R5 卒), 海崎真穂 (院2年), 木村亮英 (4年)

③天候) 快晴, 快晴→ガス, 雨→晴れ

④行動記録) 8/11 0600 駐車場 0625 ポンクワウンナイ川二股
1200 カウン沢二股 1300 魚止の滝 クワウンナイ遡行 7h00min
8/12 0520 魚止の滝(幕営) 0550 滝の瀬十三丁 0645 ハング
の滝 1030 天沼のコル 1150 トムラウシ山 1420 ヒサゴ沼 9h00mi
8/13 0520 ヒサゴ沼 1040 駐車場 5h20min



木村 海崎 齋藤

5月ごろ“北海道で沢登りをしたい!”と思い立って、クワウンナイの遡行を立案、5/27には航空券を予約した。クワウンナイ遡行に向けて 5/19 西丹沢ヤビキ沢左俣(3名参加), 7/13 滝子沢(齋藤・木村), 7/21 尾白川水系 鞍掛沢→乗越沢(齋藤・海崎)を遡行, すこし標高差や距離のある沢でトレーニングを積んだ。

直前で台風5号の北海道直撃の予報があり, 代替案として日帰りの三峰山沢から富良野岳の遡行ルートも検討。すこしそれる予報に変わったことから, 10日時点での現地の雰囲気・17時の予報などを見て判断することに決定。最終的に道南には雨予報があったが, それより北では晴れ予報だったことなどから, 決行した。

東川の道の駅で車中泊(なぜか灼熱・湿潤環境の車内)して, 翌朝 5時半に天人峽に移動, 装備を整えて出発した。天気は快晴。

1日目は長い河原歩きと膝高程度の水流の渡渉のくりかえしで多少の緊張はありつつも単調な行程であったが, 初めての北海道の山の雰囲気を楽しみながら歩いた。想定していたよりも早くカウン沢との二股に到達したことから, もう少し足を延ばして, 魚止の滝で幕営した。木村は魚を釣っていた。その間岩の上で寝ていたら左手をアブに刺されて後の二日間なんとなく微妙にずっと左腕がかゆかった, すぐにポイズンリムーバで吸い出しておくんだった。寒いだろうと思ってテント泊にしたが, 思っていたよりも暑く, 寝袋のジッパーを半分以上開けて寝た。

2日目も快晴, 台風の影響であろう生暖かい風を感じつつ, 長く美しいナメを楽しんだ。ハングの滝の巻き道は上部最後の5m程度が垂直に立っていて少しスリリングだったので, 空身で登ってザックはあとから引き上げた。ザックがそこまで重くなかったのが, 単純にロープを折り返して二人で引いてあげられた。源頭部に近づくにしたがって木々が減って太陽が差し込み, だんだんと湿地帯のような草原のようになり, その後大きな岩のゴロゴロした一帯になり, と, 変化していく景色を楽しみながら歩いていくとようやく天沼のコルに到達。その少し前から風が吹きガスが漂い始め, トムラウシ山では残念ながら真っ白だった。ヒサゴ沼のテント場も到着後しばらくすると風に運ばれてガスが漂い始め, 日が落ちるころに雨も降ってきた。一日目は滝の轟音を聞きながらもぐっすりだったが, 風雨がテントに吹き付ける音は勝手が違うらしく, なかなか寝付けなかった。

3日目の朝まで風雨は続き、びちょびちょのテントをたたんでそそくさと下山路をたどった。化雲岳 以降よく滑るどろどろの道が続き、幾度となく足を取られながらもどうにか5時間程度で下山、途中からガスは晴れ(トムラウシ方面はずっと曇っていたが)、旭岳がよく見えた。

そういえば幕営装備で沢の遡行はしたことがなく、山の規模の大きさや水量などの前情報にもしり込みしていたが、結果として沢自体は簡単で、行動時間もそこまで長くなく余裕をもって遡行できた。もうすこし長く山にいたかったなと思った。 齋藤壮呉 (R 5年卒)



② 2024 年早大山の会夏の記録

①個人山行 仙丈ヶ岳・甲斐駒ヶ岳 2024/8/2～4

●メンバー：3年：井上陽太(CL)、2年：正川修(SL)、3年：松本渚、2年：鬼塚一輝、2年：中尾翔、2年：村上竹穂
1年：五十君駿

●コース：

2日目 北沢峠→小仙丈ヶ岳→仙丈ヶ岳→馬の背ヒュッテ→北沢峠

3日目 北沢峠→双児山→駒津峰→甲斐駒ヶ岳 ピストン

●行程：

1日目は、茅野駅から北沢峠までバスで行った。キャンプ場でゆっくりした後、夕食は焼きそばを共同炊事で作っておいしく食べた。

2日目は、特に問題なく小仙丈ヶ岳まで進んだ。心地の良い樹林帯を抜けて眺めの良い稜線に出たのは爽快であった。そして、カールを眺めながら仙丈ヶ岳に到着。様々な高山植物も見ることができた。

3日目は、体力に余裕にある井上、村上、五十君で甲斐駒ヶ岳へ。少しゴツゴツした道を登ってハイマツ帯に出たら双児山に到着。その後、ザレた道を進んだら駒津峰に着き、甲斐駒ヶ岳を望むことができた。そこからは楽しい岩場と花崗岩の道を歩いて山頂に着いた。

アルプスデビューのメンバーが多く、とても良い思い出になったと思う。



②個人山行 立山 2024/9/25～26

●メンバー：3年：井上陽太(CL)、3年：飯田隼(SL)、2年正川修

●コース：

2日目 雷鳥沢野営場→劔御前→別山→真砂山→富士ノ折立→大汝山→雄山→室堂山荘

3日目 室堂→天狗平→弥陀ヶ原→美女平→立山駅

●行程：

中止になった夏の合宿リベンジとして立山へ、天候と人数の問題で個人山行にて開催。室堂の自然と立山の雄大さを味わうことができた。始まりかけの紅葉と美しい星空のもとテント泊。立山登山の道中で劔岳・広がる室堂平に心を奪われた。3日目には井上が室堂から立山駅まで歩き立山の魅力を堪能できた。



③夏合宿 白峰三山縦走 2024/9/11～13

●メンバー：3年：井上陽太（CL）、2年：中山莞爾（SL）、1年：五十君駿、1年：篠田晴一、
博士：Li Cunhao

●コース：

1日目 広河原→白根御池小屋

2日目 白根御池小屋→肩の小屋→北岳→間ノ岳→農鳥小屋 ※肩の小屋まで草すべり

3日目 農鳥小屋→西農鳥岳→農鳥岳→大門沢降下点→奈良田バス停

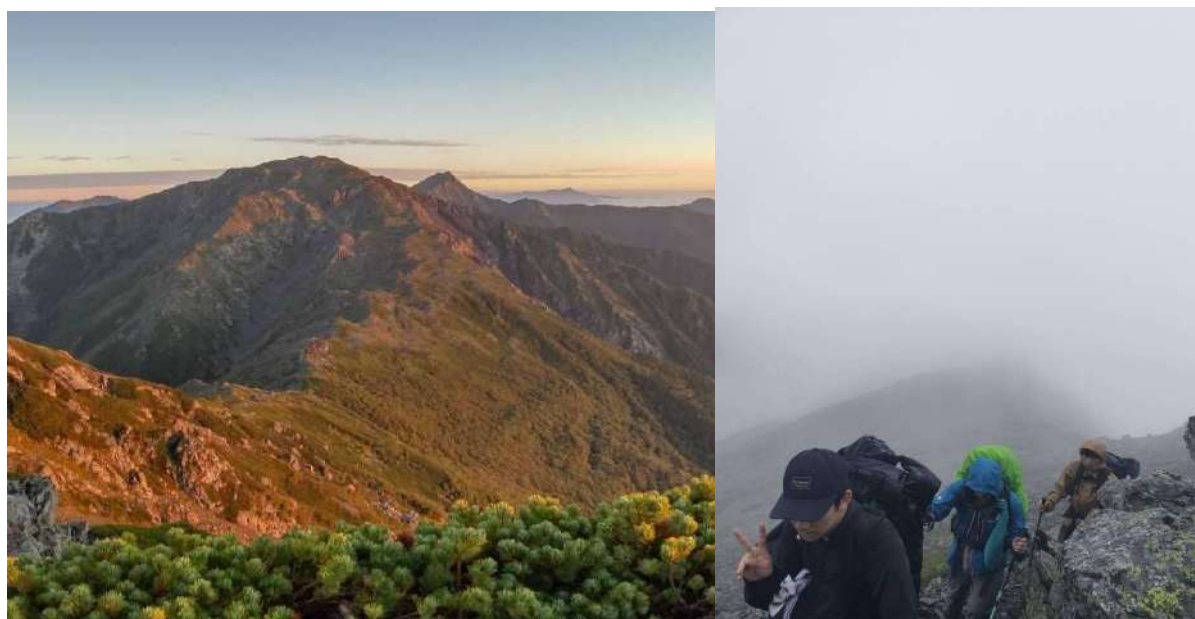
●行程：

1日目は、甲府駅集合、広河原バス停から白根御池小屋へ。テントを設営し、ゆったりと過ごした。

2日目、白根御池から肩の小屋まではそこそこの傾斜ですが登山道を歩いていれば特に問題がない道だった。その後、稜線へ出ると仙丈ヶ岳がはっきりと現れた。肩の小屋を通り北岳・間ノ岳に登って農鳥小屋へ。岳～農鳥小屋でオコジョ、雷鳥に出会うことができた。足取りが遅く、雨に降られたのは大きな反省点であった。

3日目は、綺麗な星と段々と明るくなっていく空を眺めながら農鳥岳へ。西農鳥岳～農鳥岳の稜線はこれまでの道のり、続いていく稜線が見えて壮観だった。日の出の景色も相まって非常によかった。大門沢降下点以降は想像よりきつくなかったが、縦走の後半戦でのロングコースなのでメンバーは疲れ気味であった。

山の会として大きな縦走をしたい、夏合宿にてメンバーを絞って実施したいと思った。結果、今年加入のメンバー3人を含めた5人で縦走を終えることができた。縦走の醍醐味、南アルプスの魅力を存分に味わうことのできる山行であった。



【COLUMN 1】



日本岳人列伝その 10：松濤 明

金子治雄（S41 年卒）

著作：朋文堂「風雪のビバーク」昭和 36 年、

徒歩渓流会「北鎌尾根遭難報告書」昭和 25 年

冒頭に遺書を掲げるのもどうかと思いましたが、一昔前の岳人だったら誰でも知っている北鎌尾根遭難の遺書を紹介することが松濤明を理解する必要事項と考えました。

天狗の腰掛より独標を越えて北鎌平の登りにかかりてビバーク、寒気厳しきため有元は足を第二度凍傷にやられる、雪洞は小さく夜中入口は風にさらわれて、全身雪で濡れる。天狗 8:15、独標 11:00、小雪洞 15:30

1 月 5 日 風雪

雪洞を出たとたん全身バリバリに凍る、手もアイゼンバンドも凍ってアイゼン付けられず、ステップカットで槍まで行かんとせしも有元千丈側にスリップ、登りなおす力なし。共に千丈に下る、空身でもラッセル胸まで、15:00 雪洞を掘る。

1 月 6 日 風雪

全身硬って力なし、何とか湯俣迄と思うも有元を捨てるに忍びづ、死を決す。中略

有元と死を決したのが 6:00、今 14:00、中々死ねない、漸く腰まで硬直が来た。全身震え、有元も HERZ、そろそろ苦し、日暮れと共に凡て終わらん。中略

最後まで戦うのもいのち、友の辺に捨つるのもいのち 共に逝く。松濤 （中略）

我々が死んで 死骸は水に溶け やがて海に入り 魚を肥し、また人の身体を作る。個人は仮の姿、グルグルマワル。松濤。

この壮絶な遺書は、昭和 24 年彼が所属した徒歩渓流会と東京農大山岳部の 4 次に互る捜索行の後、7 月下旬千丈沢四ノ沢出合で法大山岳部によって発見された遺骸の直ぐ傍で見つかったものです。享年 28 歳でした。

松濤明が登山史に燦然と輝くのは、北鎌尾根遭難の遺書も大きな存在ですが、それより大学山岳部集団によって営まれていた我が国のアルピニズムの歴史を、組織集団に属していない彼が先陣を切って、単独、或いは少人数で滝谷、奥又、鹿島槍北壁、北岳バットレス等のヴァリエーションルートの開拓に挑み、山岳界において北アの開拓は大学山岳部の組織集団でしかできないというイメージを取り払い、アルピニズムの間口を広げた事です。

その最も象徴的な出来事は、中学を卒業した翌年の 17 歳の 12 月に、島々のガイド上条孫人と共に、積雪期滝谷の開拓者早稲田大学山岳部もなし得なかった滝谷第 1 尾根の厳冬期初登攀を成功させた事です。

こうして、日数の要する積雪期の北アルプスは大学山岳部、日数を要しない谷川岳は社会人山岳会と色分けされていた垣根を取り払い、社会人山岳会でも長期休暇が可能な学生が加わり、困難な岩登りは社会人山岳会の活躍の場となり、戦後我が国のアルピニズムの発展が幅広く加速されて行きました。松濤明は、谷川岳一ノ倉に実績のある徒歩渓流会と東京農大山岳部に所属していましたが、彼の山行は組織登山でなくいつも少人数の山行でした。彼の最後の山行となった冬の北鎌尾根も農大山岳部の後輩の有元と 2 人だけの山行で、西穂までの予定でした。12 月 20 日入山、1 月

7日下山の19日間の予定で、荷が重いこと事前に彼単独で12月12日から16日に北鎌P2まで荷揚げし帰京しています。北鎌から西穂までの積雪期縦走記録は無く、しかもこの長期縦走を2人だけで行うパイオニアワークでした。

松濤明は極めて早熟なアルピニストでした。官吏の父親の転勤先の仙台で生まれ、東京に異動、昭和9年、府立一中に入り、その夏に教師に連れられて燕、槍を体験してから、山に目覚め3年生まで毎月のように単独で山に通い、東京近郊の山はほとんど登り尽くし、4年になると岩登りに興味を抱き丹沢の沢に入って行きました。

官吏の父親から府立一中、旧制高校、旧帝大のコースを望まれたため、山と学歴を両立させるため当時奥又開拓の先兵であった松高山岳部に入学を希望していましたが、4年時の受験では西穂から悪天で受験に間に合わず、翌年の5年時の受験では、エリートコースの進路に疑問を抱き不勉強がたり、見事不合格になりました。松高山岳部の夢は破れ、より高度な山行を目指し徒歩溪流会に入会しましたが、兵役免除のため昭和16年東京農大に入学しました。入学後引き続き山行を重ねましたが、昭和18年、学徒出陣で南方戦線に赴き昭和22年復員しました。

彼が昭和9年、府立一中で登山を始めて昭和18年兵役に取られるまでの間は、我が国のアルピニズムが最も華やかな時代でした。アルピニズムの旗手であった大学山岳部は槍穂、劔、鹿島槍の無雪期のヴァリエーションルートの開拓と、将来のヒマラヤを目指し積雪期幕営技術を確立し、極地法で未知の山稜をトレースして行きました。こうした時代の雰囲気の中で新たなアルピニズムを模索した松濤明の生涯は、昭和20～30年代の第2期アルピニズム黄金時代に至る先導役を果たしたと想います。

左の徒歩溪流会、昭和25年発行「北鎌尾根遭難報告書バックナンバー922」の貴重な資料は宮野先輩から頂いたものです。



岳人列伝付録：山岳部以外の早稲田の岳人たち

アルピニズムの登山史を紐解いて行くと、社会人山岳会以外、慶応、明治、立教、法政、日大、東大、京大、一橋などの岳人のほとんどが山岳部出身者であることに反し、早稲田には山岳部出身以外の著名な岳人が圧倒的に多いことが顕著です。他大学では、登山クラブはオフィシャルな山岳部だけですが、早稲田の場合、オフィシャルなものが存在したら必ずアンチが生まれることが伝統で、登山だけでなくあらゆるジャンルにクラブが存在し、あるいは未所属故に存在が光り、調べたらやはり早稲田人だったことに気が付くことが多いのです。

我が国登山史もその例外では無く、早大山岳部出身以外の登山家で多くの文筆を残し、登山史に深く関わり合った文筆豊かな早稲田岳人に「藤木九三」「安川茂雄」「山口耀久」の3人が真っ先に挙げられます。

「藤木九三」は滝谷の初登攀者であり神戸におけるRCCの創設者です。彼は在学中から新聞人として活躍しすぎて中退し、後に朝日の記者として欧州アルプスに登り、秩父宮殿下のマッターホルン登頂にも随行しました。

「安川茂雄」は三笠書房の編集長の傍ら戦前の谷川岳の岩場に通い、不毛な山岳小説のジャンル確立のため苦労しながらも、多くの登山史の著作を残しました。上高地で松濤明の下山を待つ飛騨の少女の話を、井上靖に伝えたのも彼であり、井上靖はこれに松濤明の遺書をヒントに「氷壁」を書

き上げました。

「山口耀久」は元代表の上田OBが所属していた独標登山会を主催していた名クライマーですが、彼の抒情溢れる名著「北八つ彷徨」によって、南八つに隠れて樹林帯ばかりの目立たない山城の北八ヶ岳を、一挙に名山にした仏文出身の彼の筆力は特筆に値します。また名雑誌「アルプ」の編集は金字塔でした。

早稲田出とは公表しない著名な岳人では、愛知学院大教授で早稲田人として一番ヒマラヤ遠征を多くした湯浅道男、登山家ではありませんが長く「岩と雪」の編集長を務めた池田常道、語学力と渉外力で彼がいなかったら小西政継の山学同志会のヒマラヤ遠征は不可能だった坂下直枝。彼らは記憶に加えたい岳人です。

10回に亘って連載して参りました登山史をつくった岳人列伝は、今回をもって終了させていただきます。この岳人列伝の原型は、以前私のHPで「山の本・近代登山と初期アルピニズム編」として連載していた記事を、前代表の行方OBが稲山通信に掲載したいとの要請があり、何人か加えて「我が国の登山史をつくった岳人列伝」として書き換えて連載させて頂きました。

長い間ご一読頂きありがとうございました。

【COLUMN 2】

～2024年OB合宿～



今年は、下記の通り 10月6日(日)～7日(月)に長野県の隠れ宿「まほろば」で2024年OB合宿を行いました。テレビもなく、スマホの電波も届かないすごい山奥で、松下幸之助氏の人生論、稲盛和夫氏の経営哲学、戦後のホンダや商社やホームセンターなどの海外進出について議論しました。戦後のプロジェクトX、海外を目指した企業戦士たちの闘いは凄いです。

記

(1) 日時： 2024年10月6日(日)～7日(月)

(2) 集合場所： 長野市善光寺

(3) 合宿所： かくれ宿「まほろば」

(4) 合宿参加者(8人)：

廣瀬舜一 (S38年卒)	山根一純 (廣瀬OB友人)
打矢之威 (S37年卒)	笠原 豊 (S40年卒)
斉藤雄二 (S41年卒)	金子治雄 (S41年卒)
行方正幸 (S50年卒)	柴原 至 (S53年卒)



天然の岩魚の塩焼き

【お知らせ】

(1) 早稲田大学山の会(現役学生)の三役の交代について

2024年10月に早稲田大学山の会(学生の会)の三役が次のとおり交代いたしました。

【旧三役】幹事長：井上陽太(3年) 副幹事長：飯田隼介(3年) 会計：深山英郎(3年)

【新三役】幹事長：中山莞爾(2年) 副幹事長：齋藤優佳(2年) 会計：鬼塚一輝(2年)

(2) 2025年総会・新年会の開催について

稲門山の会の総会・新年会については次のとおり、開催いたします。

① 日 時：2025年2月1日(土) 14:30~18:00

② 会 場：航空会館 501・502 会議室 東京都港区新橋 1-181-1 ☎ 03-6811-7017

つきましては、2025年1月11日(土)までに同封ハガキ又は稲門山の会事務局長のアドレス(fuki.yoneyama@thingsjp.com)に出欠を明記の上お送りください。

【編集後記】

稲山会通信第50特別記念号の巻頭言は、村田宣男(S54年卒)代表です。現在、稲門山の会と早大山の会の近代化、構造改革に邁進していますので、会費の納入をはじめとした会員の皆様の応援を是非ともよろしくお願いいたします。

特集Ⅰは「山の備忘録」で、たくさんの会員から投稿をいただきました。学生時代やOBとして実践してきた登山の歴史を振り返ってみると、山の会68年の歴史の大きな足跡が見えてきます。備忘録には1960~1980年代の山の会の全盛期にアフリカ、アンデス、ヒマラヤ等海外遠征に挑戦した山の思い出が寄せられると思ったのですが、会員のリードハイマート(心の山、忘れえぬ山)はなんと岩と雪の殿堂、劔岳でした。

①上田OBの不帰2峰センターリッジの積雪期初登攀、②宮野OBの劔岳チンネ、ニードルの登攀、③斉藤OBの劔岳5月の北方稜線縦走、④西山OBのベトナム最高峰ファンシーバン登山、⑤小竹OBの劔岳他、⑥行方OBの甲斐駒ヶ岳の氷壁登攀、⑦倉本OBの八ヶ岳、⑧柴原OBの記憶にない思い出、⑨本田OBのGWの穂高の屏風岩と滝谷の登攀、⑩井上OBの劔岳小窓尾根池ノ谷側壁冬季新ルート開拓等、残雪期・積雪期のビッグクライミングから記憶から消えたビックリクライミング? まで、バラエティーに富んだラインナップとなりました。

特集Ⅱは、「2024年夏の記録」です。若手OBの斉藤、海崎、4年木村の三人組が今年もやってくれました。北海道トムラウシの茗溪クワウンナイ川の遡行です。現役学生も井上幹事長のリーダーシップのもと南アルプス白峰三山の縦走(天幕)ができるまで育ってきました。来年の夏合宿には是非複数の縦走隊を出してください。

金子OBの連載最終回「岳人列伝⑩」は、大学山岳部の集合体、日本山岳会のアンチテーゼとして彗星のように現れ、若くして冬の北鎌尾根に散った徒歩溪流会の松濤明氏。彼の遺書は、「山の友は絶対に見捨ててはいけない」という山男の掟として、戦後の登山家たちの心を呪縛し続けました。次回の特集は「2015年総会・新年会」と「低山」です。これからも、稲山会通信では登山以外の会員の活躍も紹介していきますので、自薦他薦の投稿お待ちしております。